

週日の説教

金 大烈 神父 2010年2月16日(火)

《試練に勝つチャンス》

今日の第一朗読(ヤコブ 1:12-18)を見ると、最初に『**試練を耐え忍ぶ人は幸いです。**』そして次に『**神に誘惑されている**』**と言っ**ては**なりません。**』という言葉がありますね。

旧約時代の人々、イエス様が現れる前の人々は、いろいろな難しさにぶつかることを二つの考え方で理解しようとしていました。一つは、“悪魔のいたずらによって試練にぶつかる”という考え方。そしてもう一つは、“神様が私たちをもっと強くさせるために試練をくださる”という考え方です。しかし、新約時代に入ってから、その考え方は間違えであることをイエス様がはっきり示されました。たとえば、旧約聖書のヨブの話をご存知ですよ。ヨブ記を読むと、悪魔が神様に勝負を挑みます。悪魔は神様に、「あなたがよい人だと思っているヨブは、今あなたから愛されているからよい人なのでしょう。もっとひどい目にあわせれば、あなたに背くでしょう。」と言います。そして、それを聞いた神様は本当に子どものように、「ああそうか。では試してみよう。」と言って、ヨブに試練を与えます。それがヨブ記です。

これは、イエス様が現れる前にイスラエル人が理解していた苦痛の理由です。しかしイエス様は、「神様はそのようないたずらは絶対にしない。」とはっきりおっしゃいました。そして、イエス様から直接話を聞いていた使徒ヤコブは、『**試練を耐え忍ぶ人は幸いです。**』、『**神に誘惑されている**』**と言っ**ては**なりません。**神は、悪**の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。**』とはっきり言っています。

では、いろいろな難しさはどのように理解したらよいのでしょうか。私たちの人生にも試練は結構ありますよね。それをどのように理解したらよいのでしょうか。たとえば、何人かの悪い人によって、何の罪もない人々の間に戦争が起こります。相手も自分たちもみんな試練に襲われます。罪もない人々がたくさん死んで行きます。それをどのように理解すればよいのでしょうか。もし信者でない人から「全知全能で、善い神様ならば、なぜこんなに悪い人が生きることを許しているのか。そして、罪もない命がなぜ奪われるんだろう」と聞かれたらどのように答えますか。「死んだら天国と地獄に分かれて行くから、私たちはこの世にはあまり意味を置きません。天国に行くことを考えて我慢をします。耐え忍べば、天国は私たちのものになり、悪い人は死んでからたぶん地獄に落ちるのでしょう。」と説明するのでしょうか。

これは、覚えておいてください。神様が試練をくださるのではありません。人間的な原因、悪のいたずら、いろいろなことによって私たちは試練にぶつかりながら生きています。もしそのような生き方をしなくてもよいのなら、イエス様は絶対に十字架の道を歩まなかったと思います。ただ、「そのような試練にぶつかって悩んでいる私たちをなぜイエス様は放置して、ただ見ているのか。」と思うことが

あるでしょう。その時には、「神様が試練に勝つ機会をくださった。」、「難しさを乗り越えるチャンス
をくださった。」と思ってください。それが正しい理解の仕方です。

この世の中で人を痛める全てのことは悪です。神様が、「もっと強くなるために必要な試練として与えた」と考えるのは間違いです。神様は私たちに100パーセントの自由意志をくださいました。私たちはその中で、人とのかわりに幸せや不幸せを感じながら生きています。そのかわりは、自分が思ったとおりになるものではありません。いろいろなかかわりによって悪も生じます。その悪を利用するのが悪魔です。「悪に負けないで、一番正しいかわり作りをするように」というのがイエス様の心です。その後、私たちに天国が保証されます。それ以外に、「なぜ私にこのような試練をくださったのですか。」と子どもっぽく神様に怒っても意味のないことです。もし難しさを感じたら、それは恵みのチャンスだと思ってください。正しい信仰者になるための素晴らしい機会だと思ってください。実際に、そのような生き方をした人が私たちの先祖の中にもたくさんいます。先輩達がたくさんいます。聖人と言われる人々もたくさんいます。

イエス様は絶対に私たちに試したりはしません。全てを任されています。イエス様に頼るか頼らないかも全て私たちの選択です。試練も、イエス様が私たちにくださった一つの人生の意味であることを、今日の第一朗読をとおして考えてみましょう。

福音(マルコ 8:14-1)に入ってみましょう。「五千人に5つのパンを裂いたとき。」そして次に「7つのパンを四千人に裂いたとき。」と書いてありますね。イエス様が四千人に食べさせたことと五千人に食べさせたことは、別々の話だと思いませんか？ これは聖書の勉強です。マルコが福音を書いた時には、二つの資料があったのです。一つの資料は四千人に食べさせたという話、そしてもう一つの資料は五千人に食べさせたという話。しかしこの二つの話は、実際には同じ一つの話だったのでしょうか。集まった人々が、四千人だったのか五千人だったのか、一人一人数えたはずはありません。「五千人くらいだった。」と書かれた資料と「四千人くらいだった。」と書かれた資料が違うところから集まったんでしょう。

マルコの福音書の著者はイエス様を直接に見た人ではありません。少なくとも何十年は離れていると聖書学者達は見ています。いろいろな資料を見て、先祖から話を聞いて、このようなマルコの福音を編集したのです。「四千人に食べさせたのか、五千人に食べさせたのか、どちらが正しいか分からないから二つの資料を一つにしよう」と考えて2つを一緒に入れたものが今日読まれた内容でしょう。

このような福音を読んだら迷いますよね。「なぜ4000人と5000人で人数が違うのだろうか」と。しかし5000人を食べさせた物語と4000人を食べさせた物語をよくご覧になってください。中身は一緒です。弟子達の状況や弟子たちがあせったことさえ、全部同じです。ですから聖書学者たちは、これを一つの事件として見ています。

このようなことを勉強する「聖書の勉強会」を行おうと思っています。その時にまた申しあげると思うのですが、本を探してすぐに分かることは勉強する必要はありません。時間が経ったら忘れるも

のも勉強する必要はありません。一回覚えたら忘れないことだけを勉強しましょう。そのような勉強会に持ちたいと思っています。

ありがとうございました。